HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2. 円滑な双方向的コミュニケーションを目指したアウトカム 重視型の「やりとり」科目のコースデザイン
Author(s)	鄭, 惠先
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 17-27
Issue Date	2016-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65690
Type	departmental bulletin paper
File Information	toku _JISCHU20_2.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2．円滑な双方向的コミュニケーションを目指したアウトカム重視型の「やりとり」科目のコースデザイン

鄭　　惠先

1．日本語カリキュラムの改編

北海道大学国際教育研究センター（旧留学生センター）では、大学のグローバル人材育成プログラムの創設と歩調を合わせて、2015年度から全学向け「一般日本語コース」のカリキュラムを全面的に改編した（詳細は、小河原2015を参照）。新カリキュラムの中・上級科目には、それぞれの目的に応じて学習すべきスキルをもとに「やりとり」「理解」「表現」という３つのモードが設けられた。従来の「話す・聞く・読む・書く」の技能別科目構成から脱却し、４技能を複合的に取り入れた新しい科目構成への切り替えに踏み切ったのである。

2016年度に公開した「北海道大学日本語スタンダーズ 2016年度版」には各モードの「言語行動目標」と「スキル」「アウトカム」がレベル別に記述されている。この北大版日本語スタンダード構築の背景や意義などについての詳細は本特集号の別稿となる小河原論文に委ねるとして、本稿では、上記の３モードの中からとりわけ「やりとり」モードの日本語科目のみに焦点を当て、中・上級やりとり科目の全体的なコースデザインについて詳述する。

新カリキュラムにもとづき、2015年度第１学期に中級科目の改編が先に始まり、2016年度第１学期から上級科目も新しいシラバスで実施されることとなった。現在開講中の「やりとり」モードの日本語科目は表１のとおりである[1)]。

表１　2016年度第２学期開講のやりとり科目

上級	トピック別	上級やりとり（ロールプレイ） 上級やりとり（インタビュー・プロジェクト） 上級やりとり（ディベート）	
中級	レベル３	中級やりとり（基礎）３	中級やりとり（運用）３
	レベル２	中級やりとり（基礎）２	中級やりとり（運用）２
	レベル１	中級やりとり（基礎）１	中級やりとり（運用）１

中級では3つのレベルに「基礎」と「運用」という区分であわせて6科目、上級では1つのレベルにトピック別に3科目があり、現在合計9つのやりとり科目が開講されている。中級科目では「基礎」が週2コマ、「運用」が週1コマという構成であるが、上級科目には「基礎・運用」の区分はなく、取り扱う内容のボリュームに合わせて週2コマの科目と週1コマの科目が混在する。現在は「上級やりとり（ロールプレイ）」が週2コマで、ほかの2科目が週1コマ開講となっている。

新カリキュラムの導入にあたっては、モード間（やりとり・表現・理解）、科目間（基礎・運用）、レベル間（中・上級4レベル）という3要素間での連繋を重点的な課題としており、その具体的な方策については、現在も検討を続けている。中でも「やりとり」モードでは、科目間、レベル間の連携を図る方法として、①全科目・レベルの担当教員が参加する授業報告・意見交換会の開催、②共通の基準にもとづいたシラバスの作成、③学生による成果物報告会を通した情報共有、といった具体策に取り組んでいる。

2. 「やりとり」モードのスタンダード

「北海道大学日本語スタンダーズ 2016年度版」では、「言語行動目標」を大項目として、それを達成するための「スキル」「アウトカム」という中・小項目までが、3モード共通で中・上級4レベルに分けて記述されている。これらの記述のために、スタンダード構築の過程では大まかなガイドラインが設定・明示されたが、「やりとり」モードでは以下の内容を「レベルの基準」にした。

・日常的な話題から抽象的な話題へ
・大まかな説明から細かい説明へ
・命題重視から待遇重視へ
・短い表出／理解から長い表出／理解へ
・既習内容の活用から応用へ

これらの基準とともに、やりとり科目の担当教員の間では共通理解を深めるためにレベル別キーワードを提示し共有した。中級1では「正しく」、中級2では「流暢に」、中級3では「ふさわしく」、上級では「効果的に」であった。以上を大まかなガイドラインとして、「北海道大学日本語スタンダーズ 2016年度版」に記述された「やりとり」モードの言語行動目標は、以下のとおりである。

【上級】相容れない話題や場面において、平等に意見を共有しつつ、もっとも効果的な方法で議論し合って相互理解を導くことで、共通の目的の達成に寄与することができる。

【中３】自分が言いたいことを様々な表現を効果的に使って流暢かつ自然に表現することができ、相手に対して柔軟に効果的に対応することができる。

【中２】より幅広い話題について、正確に言葉を使うことができ、その場にふさわしい丁寧さで、お互いにストレスを感じることなく、対話や関係を維持しながら自然にやりとりができる。

【中１】日常的な話題だけでなく、非日常的で抽象的な話題についても、自分の意見を表明したり、情報を交換したり、話し合いをすることができる。

以上のレベル別言語行動目標を大前提とし、下位項目としてより細かいスキルとアウトカムを設けているが、その記述には、⑴内容の幅と深さ、⑵働きかけ、⑶反応、という３つの記載基準を設定した。その１つ１つの記述については、本特集号の別稿（小河原論文）が詳しい。一例として、「やりとり」モードのアウトカムの欄には⑶反応について、レベルごとに以下のような記述が示されている。

【上級】相手の意見に上手に反論・訂正でき、さらに相手の反応に応じて自分の話し方を適切に変えながら、関係改善に向けてやりとりを操作することができる。

【中３】相手の遠回し表現などから社会的習慣を読み取り、ふさわしい度合いでことばを返すことができる。

【中２】相手の反応を見ながら、適切なフィラーや相づちなどを入れたり、必要な情報を追加したりして対応することができる。

【中１】相手にわかりやすく、適切な形で聞き返したり同調したりすることができる。

アウトカムを記述する際に、とりわけ「働きかけ」と「反応」に焦点を当てたのは、新カリキュラムの３モードの中でも「やりとり」モードが、「双方向的なコミュニケーションをより円滑に行うためのストラテジーの習得」をもっとも重要な学習すべき能力として設定しているからである。

これに関連して、山崎・植村・鈴木・中西・西香（2015）では、言語教育に「やりとり」モードが必要な理由を述べる中で、実際の双方向的コミュ

ニケーションに頻出する「協調的非共鳴型応答」をとりあげている。たとえば、以下のようなものである。

Q　：（時刻を知りたいという意図て？）時計、ある？

A１：あるよ。（と答えて、その後何もしない）←非協調的共鳴型応答

A２：９時半だよ。←協調的非共鳴型応答

他者とつながりを作って協働していくためのコミュニケーション能力の育成には、上記A２の協調的非共鳴型応答のように、言葉の表面的な「共鳴」ではなく、会話の含意を的確に理解してふさわしく反応できる「協調」がより必要とされる。

以上から、「双方向的なコミュニケーション」は日常的に図１に示される輪のような過程を辿っているとまとめられる。すなわち、主に一対一で行われる双方向的コミュニケーションにおいて、我々は常に話し手と聞き手の役割を行き来しながら、相手のさまざまな顕在的または潜在的な働きかけを解釈してその人の意図を推測し、それを根拠にもっとも適切だと思われる反応と新たな働きかけを送るという連鎖をくり返しているのである。

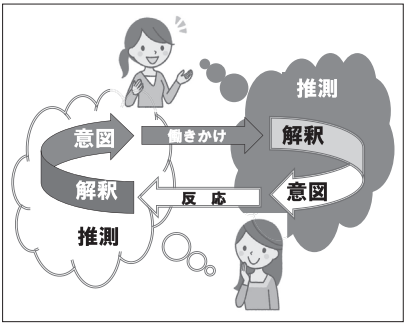


図１　双方向的コミュニケーション

学期始めに行われるやりとり科目担当教員による意見交換会では、まずこれらの「言語行動目標・スキル・アウトカム」に対する共通理解を確認した上で、科目・レベル間のつながりを意識しつつ、各自が担当する科目のアウトカムにもとづいて具体的な授業活動を提案し調整を重ねながらコースデザインを行った。

3.　やりとり科目のコースデザイン

3.1　「中級やりとり（基礎）」科目の授業設計

本センターの日本語コースのカリキュラム改編は、2013年度当初、留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ問題解決型・プロジェクト型授業である「多文化交流科目」の提供を開始し、日本語コースの最上位にこの授業群を位置づけたことに始まる。したがって、新カリキュラムの３モードでは、留学生が日本人と対等な立場で協働できることを目標とした「アウ

トカム重視型学習（Outcome-based Learning）」を授業設計におけるもっとも重要な要素として据えている。

このような方針にしたがい、「中級やりとり（基礎）」科目の各授業は、主に「知る・考える・話し合う・分析する・ふり返る」といった学習者主体の授業活動によって構成されている。たとえば、モデル会話を読んでよくないところを探す【知る（中級１）】、ペアやグループでスキットを作り発表する／寄せられたコメントをもとにグループで話し合う【話し合う（中級１／３）】、チェックシートを作成する／他グループが作ったタスクにコメントをする【分析する（中級２／３）】、自己評価シートを書く／大福帳で教師からフォードバックを受ける【ふり返る（中級１／２）】、などである。

これらの授業活動の中で、実際にとりあげる具体的な内容には「問い合わせる・誘う・断る・依頼する・話し合う（電話・メール・ＬＩＮＥを含む）」などが挙げられる。また、このような内容をもとに取り扱う学習項目には「丁寧さ・あいづち・フィラー・クッション言葉・遠回し表現・終助詞・男女ことば」などが挙げられる。

以上のような活動内容からもわかるように、本センター日本語コースの旧カリキュラムでは「口頭表現・聴解・読解・文章表現」といった４技能別の科目構成だったのに対して、新カリキュラムにおけるやりとり科目では「双方向的なコミュニケーションをより円滑に行うためのストラテジーの習得」を目指して、４技能を複合的に取り入れたより実際的な授業作りに努めている。

3.2　「中級やりとり（運用）」科目の授業設計

運用科目は原則、基礎科目で取り扱う内容や活動方法などを通して学んだ結果を、１つの成果物としてまとめる「プロダクト中心」の授業として位置づけられている。よって、現在の受講条件では、運用科目を受講するためには同レベルかそれ以上のレベルの基礎科目の受講または修了が前提となっており、運用科目単独での受講は認められていない。両科目の効果的な連携のためには、基礎の授業で学習した内容を基盤として、運用の授業で成果物を完成させるという有機的な仕組みを作る必要がある。具体的には、基礎科目で取り扱ったタスクや学習項目などを引き継いで、運用科目での成果物の内容に盛り込むか授業活動の導入として活用するなどし

て、既習内容のレビューと定着の促進に役立てるということである。

新カリキュラム実施初年度である2015年度に「中級やりとり（運用）」科目を通して完成した成果物には、スピーチとディスカッションをもとにしたオリジナルスキット（動画）作り【中級１】、インタビュー形式の大学紹介動画/アニメーション映画のアフレコとオリジナルの続編作り【中級２】、文化差異をテーマにしたミニドラマ作り【中級３】があった。これらの成果物は、教室内でクラスメートの間で共有されるだけでなく、まず、学期末に行われる「中級やりとり（運用）合同上映会」を通して教室外に公開される。つぎに、限定公開ではあるが動画公開サイトの YouTube を活用してオンライン上にもアップロードされ、学生が直接学外の知人や家族にも披露できる仕掛けを作っている。

このような授業活動に関連して、野呂・平田・川口・橋本（2012）では、日本語教育に演劇的要素を積極的に取り入れることによる日本語学習の効果について述べられており、「演じること」による「文脈化」と「個人化」が日本語コミュニケーション教育に役立つとしている。

また、「中級やりとり（運用）」科目の授業活動で重視した要素として、「異文化理解能力」を意識した内容構成と、グループ活動での個人の貢献度が重要な評価基準となることをあげることができる。このような授業設

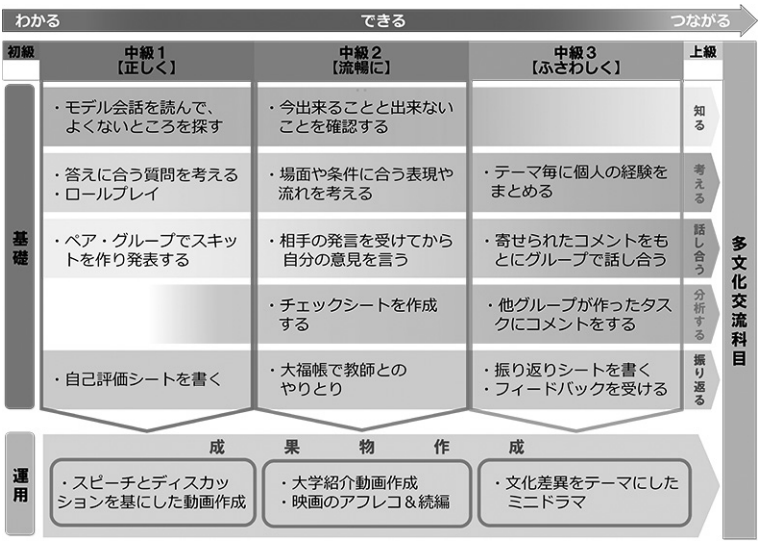


図２　「中級やりとり（基礎・運用）」の授業設計

計は、「やりとり」モードの日本語科目が、留学生が日本人と対等な立場で協働できることを目標とした「アウトカム重視型学習」を主軸としていることと深く関連している。3.1で前述したように、日本語コースの最上位には留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ問題解決型・プロジェクト型授業の「多文化交流科目」を位置づけている。よって、この科目群を下支えする中・上級科目、とりわけ円滑な双方向的コミュニケーションを目指す「やりとり」モードの日本語授業を設計するにあたって「異文化理解能力」や「グループ活動への貢献度」を重視して科目間の連繋を意識することは、継続的に相乗効果を産み出していくための有効な基盤となる。

3.3 「上級やりとり（トピック別）」科目の授業設計

上級科目のカリキュラム改編は中級科目より１年遅く、2016年度第１学期から新しい枠組みにもとづいた授業が開講された。中級科目が基礎・運用という連携重視の科目構成なのに対し、上級科目はトピック別という独立性の強い科目構成となっており、あえて区別するならば、すべて運用科目の位置づけだと言える。各科目名に並んで括弧付きで示される講義名がその科目で重点的に取り扱う機能やトピックであり、これは年度開始前のシラバス作成時にコーディネータと協議した上で、最終的には授業担当者が主体的に決めている。すなわち、毎学期の授業担当者の授業計画によって、講義名（トピック）はその都度変わる可能性があるということになる。

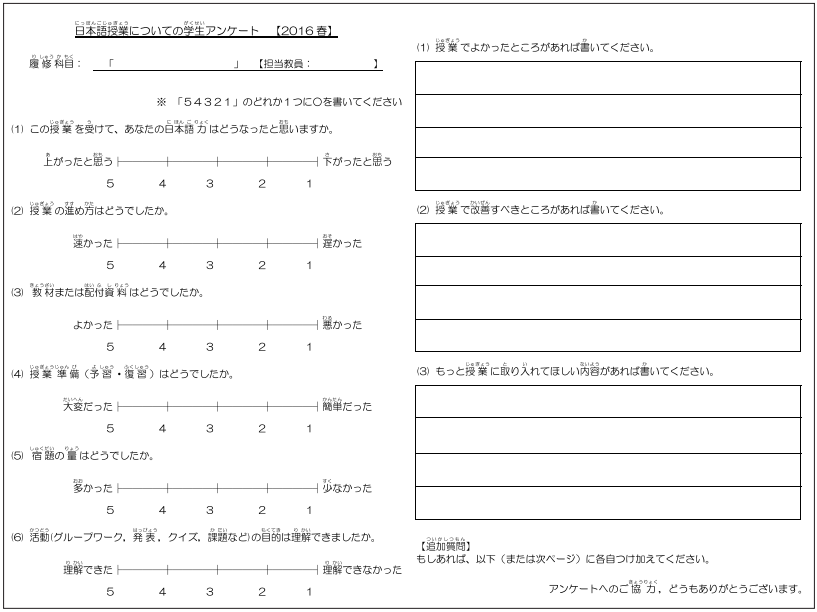
前述したように、新カリキュラムでは、上級科目のつぎの学習段階に「多文化交流科目（日本人学生との交流型授業）」を位置づけている。よって、上級科目で取り上げる内容や授業活動の手法においても、多文化交流科目で育成を目指すスキルや、多文化交流科目を受講する際に求められる能力を強く意識して設計されている[2)]。そのため、各々の上級やりとり科目は、「ロールプレイ」「インタビュー・プロジェクト」「ディベート」という講義名で示すように、授業活動という側面ではそれぞれが明確な異なる手法で構成されている反面、これらの手法が「学生主体の協働学習を主軸とした授業作り」という指針のもとで設計されているという点では、上級３科目ともに共通している。

実際、各科目のシラバスに詳しく記載されているように、「グループ活動への貢献度」を成績評価の重要な項目として打ち出していること、積極的な教室外活動を促す内容で構成されていることからも、「上級やりとり（ト

ピック別)」科目の授業計画が、協働学習を主軸とした指針にもとづいて行われたことを明らかに示している。

4. 今後の課題

新カリキュラムが適用された2015年度から、新しいカリキュラムの評価と改善を目的として、日本語授業に対する学生アンケートを無記名で実施してきている。図３に、新カリキュラムにもとづいて開講された日本語の授業で実際に行われた学生アンケートの共通様式を示す。


日本語授業についての学生アンケート　【2016春】

履修科目：　「　　」　【担当教員：　　】

※「５４３２１」のどれか１つに○を書いてください

(1) この授業を受けて、あなたの日本語力はどうなったと思いますか。

上がったと思う ― 5　4　3　2　1 ― 下がったと思う

(2) 授業の進め方はどうでしたか。

速かった ― 5　4　3　2　1 ― 遅かった

(3) 教材または配付資料はどうでしたか。

よかった ― 5　4　3　2　1 ― 悪かった

(4) 授業準備（予習・復習）はどうでしたか。

大変だった ― 5　4　3　2　1 ― 簡単だった

(5) 宿題の量はどうでしたか。

多かった ― 5　4　3　2　1 ― 少なかった

(6) 活動(グループワーク，発表，クイズ，課題など)の目的は理解できましたか。

理解できた ― 5　4　3　2　1 ― 理解できなかった

(1) 授業でよかったところがあれば書いてください。

(2) 授業で改善すべきところがあれば書いてください。

(3) もっと授業に取り入れてほしい内容があれば書いてください。

【追加質問】
もしあれば、以下（または次ページ）に各自つけ加えてください。

アンケートへのご協力，どうもありがとうございます。

図３　日本語授業についての学生アンケート（様式）

まず、５段階評価による質問項目として「日本語力（上がった　５－下がった　１)」「教材・資料（よかった　５－悪かった　１)」「活動目的（理解できた　５－できなかった　１)」「進め方（速かった　５－遅かった　１)」「授業準備（大変だった　５－簡単だった　１)」「宿題（多かった　５－少なかった　１)」の６項目を、つぎに、自由記述として「良かった点」「改善すべき点」「取り入れてほしい内容」の３項目を設けた。

2016年度第１学期末にやりとり科目を受講した延べ194名に行った学生アンケートの結果、まず５段階評価の６項目に対する全体の平均は表２の

とおりである。

表２　やりとり科目における学生アンケートの結果

	日本語力	教材・資料	活動目的	進 め 方	授業準備	宿　　題
平　均	4.1	3.3	4.1	3.3	3.0	4.4

「日本語力」「教材・資料」「活動目的」の３項目は5.0に近ければ近いほど、「進め方」「授業準備」「宿題」の３項目はちょうど真ん中の3.0に近ければ近いほど、学生の満足度が高いと判断できる。そういった意味では、「教材・資料」と「宿題」の項目でさらなる工夫が必要な科目があるように思われる。

なお、自由記述による項目では、時間配分やタスクの中身について改善を求める声がいくつか見られたものの、総合的には好意的な評価が多かった。主に、学生主体のグループ活動や頻繁に行われる細かなふり返りなどについての言及が多く、「円滑な双方向的コミュニケーション」「アウトカム重視型学習」を主軸とした、新カリキュラムにおける「やりとり」モードのコースデザインが、学生にも効果的な学習方法として受け入れられたと言える。さらに、日本語能力だけでなく、汎用的能力の向上について言及している学生も少なくなく、前述したとおり、日本人学生との協働を見据えた上での授業設計がある程度功を奏したと推測できる。以下に、実際の学生の記述をいくつか例示する[3)]。

【良かった点】

・さっき習った日本語で交流すること（中基１）／・グループでディスカッションするのがよかった（中基２）／・見たこともない新たな授業（中基３）／・グループワークでタスクを完成するのがとても良い（中基３）／・アフレコ。難しかったが、すごく楽しかった（中運２）／・日本語に限らず、他のスキルも学べた（中運３）／・報告会のときに自分のスピーチコントロール度を確認できました（上ロール）／・日本語で理論的に物事を考える能力が上がったと思う（上ディ）／・きちんとフィードバック（上イン）

しかしながら、文脈化を通した実際的な授業活動だからこそ生じる、テーマ選びや語彙や文法の取り入れ方の難しさも浮き彫りになっており、まだ改善の余地があると考える。これらの問題点については、以下に示す学生アンケートの記述からもうかがえる。

【改善すべき点・取り入れてほしい内容】

・敬語の使い方をもっと勉強したい（中基１）／もっと話すときに使用される文法を勉強したい（中運１）／・ビデオ以外の作業があればいい（中運２）／・テーマは自由すぎる（上ロール）／・調べる前にもう少し授業で基礎知識を受けたほうがいい（上ディ）

さらに、学期末の各担当教員による意見交換会でのふり返りから見ても、まだ解決すべき課題が少なくない。まず、客観的な評価方法と基準の問題である。授業活動の中心となっているパフォーマンス課題をどのように評価すべきか、正答を示しづらいコミュニケーション・ストラテジーをどのような基準をもとに評価すべきかなどをさらに具体的に検討していく必要がある。

また、レベル（中・上級４レベル）と科目（基礎・運用・トピック）の間に、受講する学生にも明確に認識できる、より可視化された連携が必要である。現在のところ、教師間の共通認識の確立、シラバス作成時の情報共有といった形で連携を図ってはいるが、このように教員側が連繋を意識するだけでなく、互いの学習項目に連続性を持たせるなどして、より実質的な形で連繋ができる枠作りが必要であり、さらなる工夫と改善が求められる。

注：

１）「中級やりとり（基礎）」科目の場合、受講生の人数が多いため、各科目にはＡとＢの２つのクラスがあり、原則同じシラバスで運営されている。

２）多文化交流科目が育成を目指すスキルと求められる能力についての詳細は、青木・小河原（2014）を参照されたい。

３）自由記述は原則、実際の文面のまま転載する。記述ごとの文末に付けた括弧付きの内容は各科目を示すもので、「中／上／１／２／３」はレベル別を表し、「基／運／ロール／ディ／イン」は科目別の略称で、正式科目名は「基礎／運用／ロールプレイ／ディベート／インタビュー・プロジェクト」である。

参考文献：

青木麻衣子・小河原義朗（2014）「『多文化交流科目』の開発経緯と意義お

よび課題」）『北海道大学留学生センター紀要』第18号pp.3-17
小河原義朗（2015）「多文化交流科目を中心とした日本語教育のカリキュラム改編」青木麻衣子・小河原義朗（編著）『国際本部留学生センターブックレット１　留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える』pp.83-96
野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾 編（2012）『ドラマチック日本語コミュニケーション 「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』ココ出版
山崎直樹・植村麻紀子・鈴木慶夏・中西千香・西香織（2015）「学習者用文型リストに『やりとりモード（＝会話モード）』が必要な理由」日本中国語学会北海道支部例会（北海道大学）2015年３月21日

付記：

本論文は、鄭惠先・須藤むつ子・今泉智子・水谷圭子（2016）「中級「やりとり」科目の実践報告―アウトカム重視型のコースデザイン―」『日本教育方法研究会誌』Vol.22, No.3：12-13に加筆、修正したものである。

ちょん　へそん（国際教育研究センター准教授）